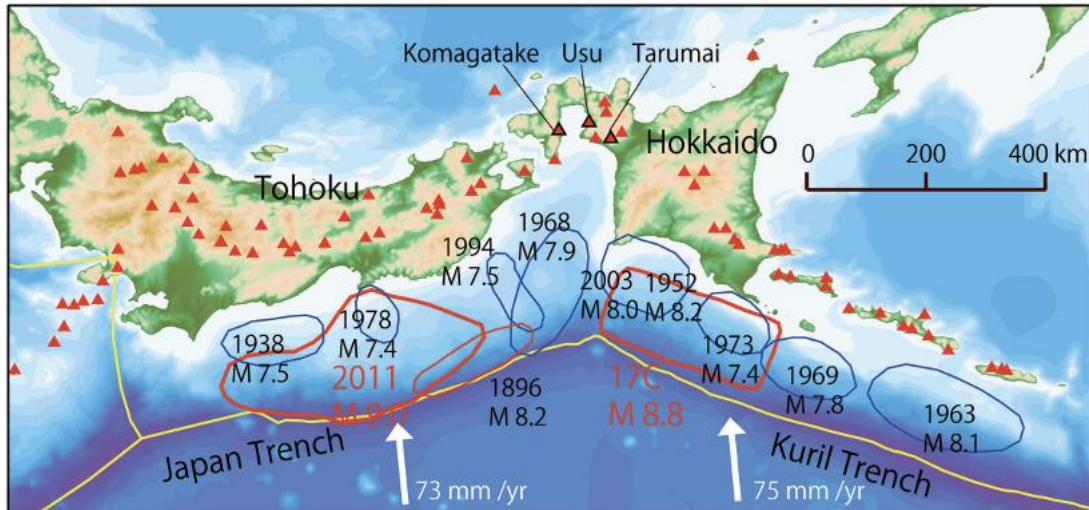




アルマゲドン地震とは？

この言葉は千島海溝沿いで約 400 年周期で発生すると考えられている巨大地震をさす言葉です。ちなみに「アルマゲドン (Armageddon)」とは、聖書に登場する終末的戦いの地名で、「破滅的規模」を象徴する言葉です。

北海道沖から北方領土沖にかけての千島海溝では、過去に非常に大きな地震が繰り返し発生してきたことが、地質調査や津波堆積物の研究から明らかになっています。これらの地震は、マグニチュード (M) 8 後半から場合によっては M9 クラスに達する可能性があり、巨大津波を伴うと考えられています。



佐竹健治, 17世紀に千島・日本海溝で発生した巨大地震, 地震研究所彙報, Vol. 92, 31-47, 2017.
<https://www.eri.u-tokyo.ac.jp/BERI/pdf/IHO922401.pdf>

なぜ400年周期という事が言われているのか

北海道東部(特に根室・釧路周辺)では、過去の津波堆積物の調査により、約 300~400 年おきに非常に大きな津波が襲来していた痕跡が見つかっています。これらの研究から、「千島海溝では複数の震源域が連動する超巨大地震が、数百年スケールで発生している可能性」が指摘されるようになったのです。

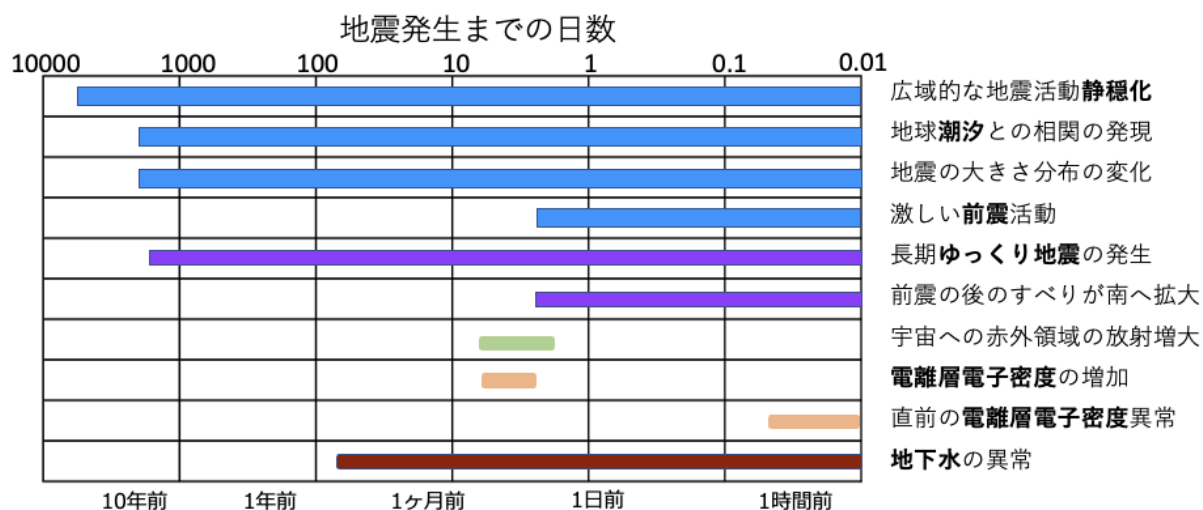
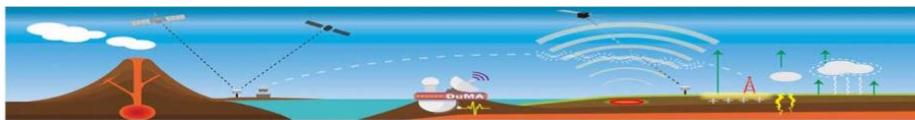
このタイプの巨大地震では、揺れよりもむしろ巨大津波が最大の脅威と考えられています。それではなぜ北海道沖での超巨大地震がこれまで知られてこなかったのかは、アイヌ民族が文字記録を残さない民族であったためでした。

南海トラフでは古文書により紀元 684 年の地震が日本書紀に記録として残っています(白鳳地震)。しかし北海道では参考とするべき古文書が存在していなかったのです。

北海道沖の超巨大地震は切迫しているか？

2011年の東北地方太平洋沖地震(いわゆる東日本大震災)の前には色々な異常現象が10年以上前から生起していた事が発生後の研究により判明しています。

次のまとめは気象庁が中心となりまとめた地震前の異常現象で、横軸は対数スケールの時間で表現されています。



2026年2月に DuMA/CSO の研究協力者でもある静岡県立大学グローバル地域センターの特任教授の楠城一嘉博士を筆頭著者とする論文が、世界でも最も評価の高い(掲載が難しい)ジャーナルである Nature 系列の **Communications Earth & Environment** 誌に掲載されました。

<https://www.nature.com/articles/s43247-025-03075-6#citeas>

この論文では、「北海道沖(17世紀型 M9 級地震の震源域)で現在、応力が高く、かつ増加している可能性が高い」という判断を、複数の独立した観測事実を組み合わせ導いています。

中心となっているのは地震学で最も基本的な統計的性質のグーテンベルク・リヒターの関係から導きだされる b 値というパラメータの低下現象です。 b 値は応力と逆相関することが知られており、低 b 値 = 高応力状態と言う事ができます。著者らはこれを、東北沖 M9 直前の状態とほぼ同レベルだと指摘しています。さらに 2008 年以降の長期的な「地震活動の静穏化(Seismic Quiescence)」が発生していると結論づけています。地震活動静穏化現象は DuMA の地下天気図が扱っている概念です。

日本列島陸域の地下天気図®

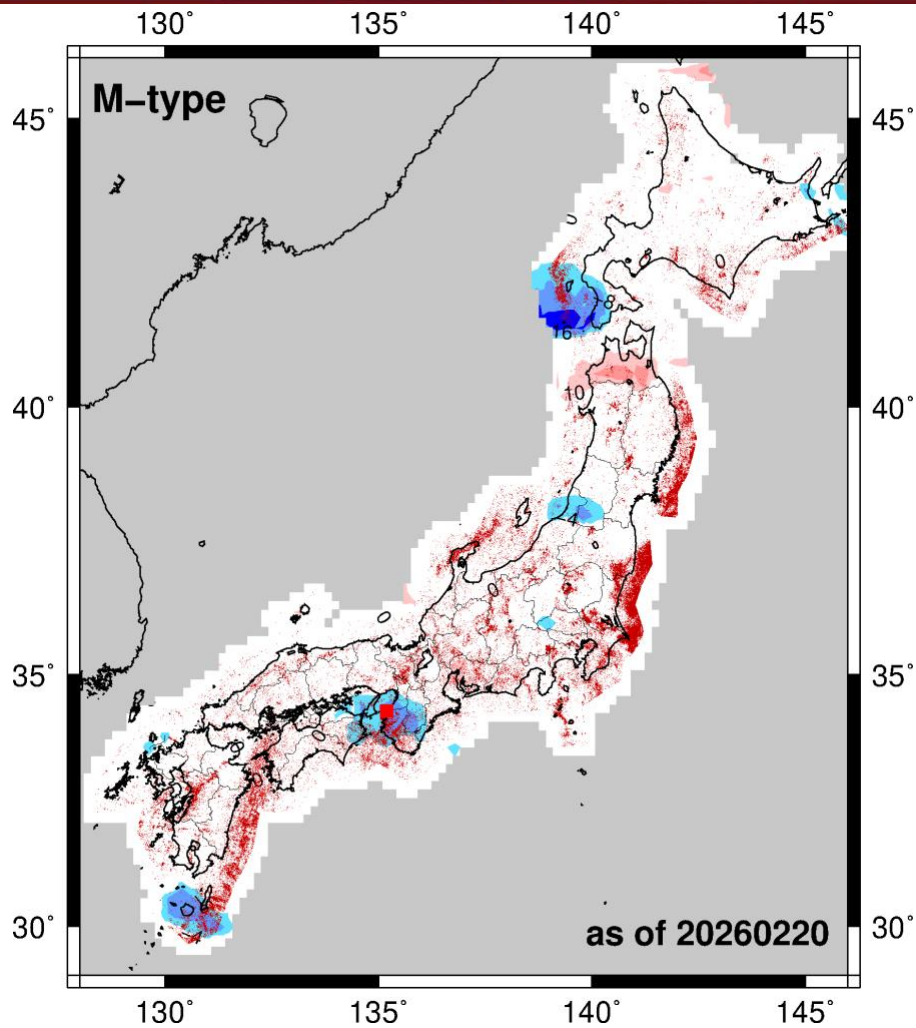
1月19日のニュースレターに続き、日本列島の主に陸域に特化した地下天気図解析です。今週は2月20日時点の M タイプの地下天気図をお示しします。

北海道東部の地震活動静穏化(図中の青い領域)がほぼ消失している事がわかりました。さらに九州北部の地震活動静穏化領域もかなり小さくなっている事がわかりました。

今年になり、たとえば2月2日付のニュースレターで、茨城県や千葉県の陸域にも顕著な地震活動静穏化領域(青い領域)が出現している事をお知らせしましたが、今回の陸域に特化した地下天気図では静穏化現象は確認されていません。さらに昨年12月8日のニュースレターでの解析でも茨城県や千葉県には地震活動静穏化は確認されていません。

2月2日付のニュースレターと今回のニュースレターで異なった結果となっていますが、これは2月2日の解析のほうがより深い所で発生する地震まで考慮しており、さらに解析に使用している地震のマグニチュードも異なっているためと考えており、どちらかが正しい/間違っているという事ではありません。

現時点で言える事は海域の地震活動の異常が大きく解析結果に影響しているという事だと思います。



2月20日時点のMタイプ地下天気図

次にお示しする地下天気図は昨年12月8日のニュースレターに掲載した地下天気図です。

現状は、

- 1) 紀伊半島を中心とした地震活動静穏化は解消傾向とみられる。
- 2) 九州北部の静穏化も解消傾向
- 3) 北海道東部の静穏化もほぼ解消という状況かと思えます。

また新たな地震活動静穏化現象が北海道南西沖で確認されるようになりました。こちらはもう少し様子を見たいと思えます。

